



繪  
新板  
奇傳新

伊13  
2398  
2



伊 13  
番 2398  
巻 2

奇傳新話二之巻

福善

禍善福悪建部軍方為發跡

人間の業衰福福の縁つる繩乃たてし轉環無端賢善乃  
人衰福とほぬれど好悪の人常福と得るあり古今替  
幸あく人の善と候し悪と返るの心をきひと人非轉變  
によふかのごまうれども諺にたまふ福も天の自然善も  
祥し悪と買はるの難歴たとしてたがらば道によふ共乃  
轉變のゆゑに我揺瓜矢さるの改富子あり今もむうと  
あんねはる徳と本家の騎士に建部民建伊沢在自とる  
若知年とる竹馬乃友あく共子共善に連し度く戦  
功もあつて且乃と好む移事正しかりぬ故子二家兄弟の



奇傳新話二之巻

おとくありて其妻の古人の妾ありや一藩にも是れ  
稱せり其子一子あり民部が子と軍をよみ力もあつて  
心飽すまで極く辯舌流りておとく武術に達せり伊沢  
一子の兵庫とよみ生得温調ありて眉目蕭しく武藝を烈  
く志す忠孝の志あり一家英邁の妻なりしが軍を  
兵庫も初年より同隊の勇なりおとく實子骨肉の兄弟  
乃おとく一民部病死して軍を其孫にまき官務に力  
用ひたりた日一回おとく無聊なりておとくに  
懐向の情遍りておとくを妻の身にまわさればおと  
て後事と擲き暮りておとく子兵庫が学問と好ぶ  
と其意にほりておとくを志せんと欲し其後國内

家た学問を志す其國志あり其皆世学扱ふ事なり  
司兵庫が僕としておとくを志せんとし其後書及  
其家僕も背肩を身軽にせりておとく父母に告げて途  
に去りておとくおとくを志せりておとく父母の命  
をさぐりて防刃及游学の趣に語りておとく別れ告  
ふ軍をたよみ無事にして南のん事ありて疾に病  
難治もあつておとくおとくを志せりておとく告  
事平生の交誼またおとくといひたれを志せりて親  
老垂く思惟けりおとくや昨日に及て其妻と使せり其謀する  
おとくおとくとおとくとおとくとおとくとおとくとおとくと  
おとくとおとくとおとくとおとくとおとくとおとくとおとくと

有りてありぬありは故是衆あり書翰との意と速贈れを  
今とあり談論せざるのとき先某の語よりははるし  
曰は下は此の他中あるは知れしと今や天下争闘  
のるにまゝとさるる者日夜捕員の大なりと思ふは南位か  
里世耐はありてあまねるは学問の修め何のむごや思  
慮とほくはやど臆心と生じて臨場の機案となくは  
我公甚これ瓜熟は世故に先修備ありは愠と次は我意  
と説のそ其存一礼して知己乃若言某の語は感佩せざる  
おわは四海去朋の耐臨場は業の南耐兄と共にはく  
あをく功徳ありて金形の説文とも詳文せり只其語  
にらま耐は血氣は清くして心義の行は臨る是古今

其例多し某若道に志く國民と活るの徳は徳一礼  
く國家の補佐はあさんとわは兄又少くはむむか  
軍を笑て只別強と喜んで道は用ふあは士の志流  
は我公の業はるにゆきて義不義の別あり只其人の  
よ子物あるは心とせば其氣充滿して何等のあもあ  
すくはあありは衆思ひ止くは学問の修め無量なりと  
は世耐は司のき度は送りあは世論と笑は入く軍を  
と割し是下の耐我子のあは故は耐は是下の耐ありは  
我説はあはるは本老人の身はあはるは子万歡喜ふ  
はあはるは是下の論甚無業にして其説の心とは  
而はあはるは古民は後生ありせん何と其論と是と志

終るん凡そ其君子志を以て其國の用とあり只暴業強  
力試み之任とするにわづむ日中の事性勇氣張りて  
立り藩を一加ふに及ばず多し忠孝を以て一萬民  
撫育する徳を以て之を國に奉るに事せざる君の股  
肱といふなり故に今將を以て防及之に事ありし是  
下亦今は友の弟を以て世に及ぶるに古民被及存生か  
らば必將と其子以下と保して事あり先あるべしは亦  
思ふ所のつくむより別とあり亦其兄弟の事りと事  
くはんと親切に教導あり之れを軍を平服して亡く庭  
刻と笑ひしと一某はく人何ぞを存及及の事と止んや子  
万道路に情なく事ありと子く及及の事と其及某

亦そび得んと翻然として其心孤改るに伊沢父子を  
喜んで念頃小暇に及んで立出たり軍を以て送りて  
伊沢に及んで思ふに其存及及の事と戦功稱もされを  
上子出かざるに学問長とて道及及屋形を輔け大友  
に及んで我事必被官のおとくありと志を以て今由て  
等にならざるをいふと彼が指揮は後人や後を以て  
と志にならざるをいふと退身ある時に彼が損ありて我亦  
利を以て不給を以て身の上と志を以て敵とて尚國と志  
りむるに及んで邪念增長して是より伊沢の家にあ  
るに及んで其の世後軍を以て力と志を以て大友の家  
に傳及及と財給と志を以て其の家に入るに及んで

謙一其意孤ひよくも媚とゆく随後あはれえより驕慢  
の大友治心碎してつまずき若年にして武藝に長じ戦功も  
著しく且威儀辨舌花やうある英士屋敷の先途ふたぎさ  
早と沙汰わけて君あも大切のちとあがりあひおくの賞  
差をのつて一五年の間に福成増一増成をめて一時藩小称  
せしふ伊沢屋司の篤實の勇士軍を巧言令文以り  
然るかのぶとく本公とあつる夫誰とあとも用ふる所  
ども古民知死に臨むそのあつく彼と我を托して何ぞ他人のお  
やくにさるんやとひそく小軍を吹鳴んであつる下君龍を  
アにあり茲大友麻呂賞してあつる士を先づの榮福し  
よあゝあるに足下のゆみとるに己あつと遠にりり英

氣は掩ひ隠し媚をせたり其應對偏倭あはれえより  
是れをさるるゆしてひそく人意に任せてあつるあつる  
は久しきごとく其身に害をせざりぬれぬは我  
國にわづら古民知死に臨むそのあつく彼と我を托して何ぞ他人のお  
やくにさるんやとひそく小軍を吹鳴んであつる下君龍を  
アにあり茲大友麻呂賞してあつる士を先づの榮福し  
よあゝあるに足下のゆみとるに己あつと遠にりり英

老耄父人の發跡と好きて立ちかき名残りして我とるり  
おとら落し金とん愚人と毎のあかたに其端よ心服  
の姿とあつりてけがらりて詩とて拂ひ除きするのそ  
侍已久しく家いませ師とまより同氣相求る朋友に對  
て伊沢父子歎きぬくに悪口一店司り己孤悔めけるおとを  
と轉倒して言諸公さて妬心のおとく語り議せらる人  
情のうりやきと死兼く店司がけりて一三孤悔むりの  
一圖は笑てたしとわらんと彼大官の家ふ入るも是孤説  
出て黑白引らぐと倍り笑まいつりて後なる目も皆  
其心とあつり人まも自踏んどあひ免子足輕たねの役  
本と四能く平士とありぬ店司これと恨の心真末もあ

先子赫めらる孤憤りて知て我妬心ありと難一世流  
言一藩ふ及て今かく後事と辨さる是我心とするおま  
らだ只軍ちが二生孤説らん其人の画ひよりあると之と  
も古民初子對しとわらひた融全我教道守の印か  
ざらたよりのことあれども田耐の勢赫孤幼くやと逆意増  
長せん誓黙するに志たんとまより困窮一室に在る軍書  
に眼とさす戸と出ざる事教月にあぶありの耐店司や同  
組の老士は又案あり今や四月の天誓とやして一室にの  
こ暮し終るる室子病と求るにを一近日に流しおと漢  
船孤候して彼等に魚孤ととりめて一日の奥ととらんや  
と豆下にも同初わらんやと誘ふは店司も郊外の遊行

ひた然とるふあれを天子喜びよく許諾し其日に  
て竹葉等羽衣として付ひせり奇則の江流美景天下  
の奇觀あり騷人の賞譽する所難更一天雲なく日光清  
朗として行路の奥限りあく江をた漣と敷せし四の漁師  
舟段とそして船板也り獲も多し園奥舞とそして夕  
陽傾き倦鳥ゆり落暮月東山子をりて夜系を目み  
悦ぶかぬ語一茅庵に立きて足元休るに世塵を學問  
と好きて帯に防刃子をりたるが店司が子兵衛と云ふ乃  
学なあくま存学同業をの物語りをも御省の傳りわ  
つと若くは今宵もどゆ着もあらんうとほどくの物語りあ  
時うりりれを店司心はさて同伴の誌士も向つて者へ

御宅志るる一某の亭坊と用儀のり詠より御家あはれと  
念流子中きりに各領掌として別と若亭坊子謝辞として立ゆり  
ねまより亭坊と防刃学授の根子大内家般雲花の執事委細  
に護詰しき存が学同成就と悦び初更とだく眺とほ  
ぎて立出月にうりて静ふ歩むた右松樹覆りて蘆葦常  
きあれたるりて黒羽衣の次郎殿を面子のりまきと挑灯  
おせると羽衣に切羽を店司心得せりと抜同もあ  
ぞ彼曲者と如き御家けに切放し立出る後より同若くは曲  
者おとものだ店司が肩先五寸をうり切込所ありうりそ  
ち刀爪拂ひさるるだ附入るうり返り打倒し衆りうりて  
勝りまき意氣あつての根藉る但強盜の取らまはれ中



ぐりしと責問ども音あけきばらうとの胸の火引寄せて振  
 わざり間子下り曲者指添爪抜く横腹と突ぬせば流石の  
 庄司世手に弱りかぐら火とのぎて刃をばさうく建次  
 軍をあり己人畜親とひく一に某に仇おたひりある由と  
 つもせもえだをねくして指込短刀一本より庄司も心神  
 悩乱して反るお狐とらうく押さえ止め爪指んとせしあまは  
 りく人足多かれを軍をい慌て逃去せり馳来り人救は庄  
 司の内室一人唐室に残る狐使めく志きりに胸裏きき追  
 かがら若堂中間立い人あく馳付世ありさぬとらんく大よ孩  
 きか抱して息合狐刃もまぶ心附く犯出り女房とるで  
 大よ喜び悪逆なるの建次軍を我陣りと附くは仕合

に多りい音狐き度にはえ時とゆく仇おとすし志は  
 當時彼が勢君の寵愛よく大目多くあま子存撫見怒り  
 仇おの形新せば憐れむの上危多く一とく時節を伺ふ  
 ぐりしといひさうく音もさうく口くやの一言とい世の  
 名残とおゑき息あなれを女房も悲歎の涙せきあつた  
 取乱れ身ありしが流石の庄司が妻女は取取所乃若  
 と鳴んで右の次第と云合め世地より物念なく我又仲間の上  
 必ぬく上達せんと死骸と其俣にして立陣せり既に双  
 方の折くよふく検使り吟味の上庄司が僕と切きる  
 赤い道々にんある人おむ庄司と切殺しける者有は逐電し  
 て行方あらば必定云強切あつた近國の盜賊刺とん



奇傳新話卷之二



奇傳新話卷之二

た先の業ありと詮義をわたり検使の言上  
おはす慈司評議の上伊沢左衛門の士とたのりく  
召し出さず盗賊のふたりのあか切害にまよひ  
里をまたよると家名断絶の命下りて妻子に家賊  
りる上の何方もえ退くぞと邪の裁断子左衛門  
兼く角のふんと覚悟がら意恨やふたぐ家賊引  
拂ふ兵庫取者して道ゆく世ゆはとせと息は  
ぞ弛まら母に對面一委細と笑居きて切齒して怒  
天と慄く直子建初とおとんとらや駈出ると母  
押止めて父の遺言と説きせ今怒りに争いて  
狼藉者の汚名ととりておとんとらや駈出ると母  
共ら

大死ありととかさ口院制もるに兵庫も道理  
時とゆふまるとと奴婢と集めて晒はたり  
民の角次官とつる者氏系山くえ本左衛門と別  
は家にて守りて母子一旦の安居とせしは六角  
とこいとも家富て智量修りありは英士あり  
左衛門非業の死孤悲しと山くえ父の仇討と  
おとんとらや駈出るとおとんとらや駈出ると  
附堂上家にて勤仕一人の娘の容儀を羨みと  
と羨み初年より兵庫と云號ありて双方の父母  
安んじたりは度の夜に下りて兵庫母子其縁と  
説ととも次女史婦を引あくるもて娘探兵庫と

成むんを止るゆき貞節ありありなれを親も  
詮方多く只其時と信居り一日も庫は遠の唐をと訪  
ひて其夜七人の談話等と坐種との物語りに日もな  
なれを唐をひてとてに止めても翁世唐の物語に令  
唐一のより居るものた用心して必要あれと談話あは  
兵庫もあてて止宿せり夜更りまで支談一室  
並びに麻乃が夜半さう一人の力士忍ひ入大なる鉄棒と  
持くあ人孤あへ横さぬに胴腹とさううに打兵庫の腰  
と打さかぐら枕の力を搦く横さぬに彼曲女孤胴切と  
紀よんとすふに腰立だこの毒念と力と杖ふあせせも  
あは秋身のおくくあはに亭坊とゆふに昔あいつりんとも

すべうらた天會四子はまて父子共にかゝ非業の死とあは  
やと一心と信く其命にあらはに影ありありのさぬありを  
あはて六角次官兵庫が唐室へ入りてゆらこれを母と共  
に大子懐と慈く守て七八人其命難人と多く引候して  
宴にあり麻乃討けども音あ大毒のむそ伊沢兵庫  
唐や母をたるとゆらに兵庫次友り智と笑く大子懐び  
某家子たてくども身折かあらは打破く灯火は刀を  
あはつたにねてを愛ゆのりと紫の戸押破りて入るん  
を亭坊の腕子腹と打裂れて死して久し兵庫の腰とお  
ましく骨推けてまゐるのらだ切殺せく曲女孤吟候すれ  
ども志れど御く次官が僕の中にるあいつく伊勢落乃

盗賊の張む松坂九島といふ古今の大力ありけし乃其  
棒にのぶるを鉄壁も摧けざるといふあり云庫君死す及  
をさるのこゝろに一方に彼と切殺しめしむに其子の勇士あり  
や古風巻らるる次友も無庫り死に及びざりと喜びく無  
庫とあ抱し二人の死骸も取扱せ其夜子孫家た引とり  
僕一人と残して皆を去るやと伺く庫室ふたど  
くして其僕もゆりめする裏運の時といども義志乃  
初のおとく災禍に罹り栄運といども不義の凶志を  
罷ふ誇り意の俚に善志と殺し或は傷て我意は困  
中に善志と天乃善悪應報の報りたりありの信守懐  
しむる

禍悪福善伊澤兵庫田家運

天地に石測の運あり凶禍の運ありのり時ハ勇志も英志を  
折さ縮者も本と昏迷人信乃免れざれば死してい  
角次なり智量のありて兵庫並子二人の死骸を引とり  
家人死るべく口ど先して度主は密子厚く葬りて家士の  
内勇智ありて去る人死擣てて金錢と多く持せ伊勢路の  
盗賊の窠窟に到りめて利害と競うせぬ云庫り腰骨ハ  
療せんとせしるに流中の良醫と招き其秘子死にせし  
むるに骨をさぐりて推測して活方のせらばなりし  
ふに母も大子力孤落娘標ハ紅粉ともとの夜日殺傷  
とるあれど大精を以て早朝とら垢離はくは遠子

伊勢大御宮公孫して兵庫が病全愈公祈誓し一身  
 おもた代らんものと新公其精誠實に誓すふふたし次  
 けりくもに腰骨折傷して療養公公常に優そ  
 不み多し諸醫の論るおとくハ腰下血多し脈脈づく  
 だうだうるに肉色常の如く元氣力よく食事をむ  
 必不治の病子の如く強ふ療治せむ決定治んがうと  
 思号し且公に建初軍を兵庫公母とて人たれだ  
 切害せんた久しく室に留むがうらと伊勢内宮の神皇  
 嘉徳本何某親族の縁のりて潔白正路の性質あれば密  
 に公を送るく公も療養せしめんと母子に詰るに  
 兵庫涙と流し恩人の慈愛恩義死んとも誓はむすぶ

だう某不仁の人とあつて大層もなせだんこの骨屋と  
 うけて慍慍にそとだえられも恩人の命肯くだうらに万  
 事宜しく希ふあり母某天皇皇孫信敬とるり多  
 年学接になくも一歳一度必氣強は尚年世榮子解く  
 其幸の志るに交地子とんり骨髓の類をあり寵  
 遇謝とんごめいと落涙して述べれを母も子方の慈恩と  
 謝してひそくに夜来駕に乘りてこれと送る娘探頻に  
 送ひりて抱擁り度形をあれも次女世間と憚り許  
 さだこれより操別子形所ありと長子神道に委し  
 る智徳の老女のつと老若其徳と慕り操世夫婦に後  
 がつ志願の旨所ゆ其示教とゆらん事と希ふに次女

笑く汝が胸中其えにたぐらるる所知る彼神道の智識  
あれをた婦子後ひ教へん其の甚しと評言とふに  
た子悦びよくた婢一人と召連く彼た婦が家たゆと隨  
身し晝夜子其教へたりは耐建勢軍たひひの位す  
伊沢み子張あさおと一屋形の氏族依と本彈正とる位  
悪の人兼く叛逆の企わらるるあくい人子取く悪  
才徳堂の一人とあり忠臣所退き信奸所進た時と伺  
が乃謀討他事外えんども大藩人子走一かた執り  
依と本監物彈正が企建勢が凶悪所悟く内々忠義我乃  
英士所招く國害と除くの討へんと密に六角次友  
が智量あつてい儀子ちの人物とあつて兼てより入總

あれをい度の評議國家の大才あれを疎畧にまてとて  
だくは智量の人と諍論して脈と圓りにあつたと次房  
振き密室たつて國家の大才と諍り次房辭するふか  
大義の由段と論弁し其序に伊沢彦目ら接死を序が  
折備は是建勢軍たが不為あるゆと新つるに監物も大子  
駭く兼く去まもあんといひたふが皇下の教は  
て其奸謀明くきこれとあつた考の時ハ初のおとれ類  
後中教多めん我は賊と捕へく兵庫が不懐とませし  
むとと密後教別にして次官も喜びゆりをれり  
に軍ち兵庫が次房が家にありては出でて彈正と相  
諍し急に兵隊と命とて士卒引俱さしめ次房が家

にさして屋敷余あり伊沢玄庫は家臣に在りし時  
 のもどかれを早に後とて一と有りたれを水舟立せし思  
 ひ高らざる公令伊沢庄司の兼て懸念にありたれども  
 彼米業の死と遂に後妻子の事一向なせん何人の説  
 言や世家前後に口ありておの固固あり屋敷  
 嚴令あり者なきもあてて吟味ありとよに武院  
 も其後あり有りかたは事ありと前後の虎口は事  
 て固め詰す下知して家内と争ひをむるに奥帳内  
 婢女の住居ありおゆと次官ぶらうらも引くも  
 に一急の怪さるふたれを武院も疑念と晴し  
 と亦屋敷とするひ某等が役事に期目あり居るは

が一窺りしむるゆゆとに篤実の賢士ありと廉衣賞  
 て立御の軍士の玄庫と得て客子切害せんと欲し  
 に玄庫と空ありて立御のたれを中とりぬ事ありと  
 さぬくに思ひて想得をりえ身次官が娘探の向  
 國一の美人のゆえあり若て玄庫と云あがきありは極  
 によろしく必定固ひ思ひに次官思ひあり  
 即ち後して美色ひもあつたはあつたは彼娘をこれ  
 なく書とせばそのつらう勤務とあるべしと多弁の人  
 とかして次官が方よりありて伊沢庄司の父は  
 兄弟の交りありて父殺しては我も庄司と父と  
 庄司も亦我と子とあつたはるに先年とる思の横



死すよめて其家歎後其父母にありの悲傷  
ありし何卒一子兵庫海軍の死書とて新ありと  
いふもいふあり諺口や屋形甚憎ませのひて其も必  
りれど其も死ねどもあるべし生不又伊沢と交  
りわりて息女とめく兵庫と妻合するの物諾某もよ  
くあるふあり今兵庫上の処あとうけて其も人必  
然とまざる付の某も庫にありかりて息女と妻と  
交りて厚くして伊沢が供養にもありなり入りす  
海軍説と山所かりて述せたりに謀法辨とつる  
て始末はぬびしうに達したに次官かてあきかいて建  
部氏の厚意も方感いして実子故人の夙あり醜き

娘室よとあえんぬ感謝したえだ命のおとく兵庫今  
屋形の勘氣と義の離散とれを娘との縁の自後をり  
建部氏も娘も付の猶も庫に嫁せしむるに同ト某も  
婦が喜び供ふ西ありいんげん娘採兵庫改易の後  
離縁のありありとさうして數月以前家却りり方  
あまだを尼子志とつて遁世ありし十日の間に兼  
てて夫婦力と落し後悔あせどもうらなむとてひ禪  
房にのり者再修しうらなむらば是れあくとその言  
ゆりせりたりも女の自心す告びたうらなむらば  
命にあらざる身あらだて双眼子涙とらふと善く其  
に堪えも憐然として其心孤家知して立寄る軍者に

けきぶち子幼きも父失ひしとくハ伊勢守の盜賊松坂九  
郎が手下の者共子命とて見合はるに兵庫と切殺して  
後の慈悲断る」と其手帳とぞ切しりなりとて  
云存親子ハ鶴本ウ室へ入り次官が密書と出しく始末を  
詰りに鶴本ウ子駭ひしとくさうとく親子と深室子伴ハ  
家内父戒めて客人あり事と唱へるは静に次官が紙  
面と讀みて是より親子といふなり兵庫が 天照皇志  
信乃ありいと感して神祕と傳へく日々に真跡あり心  
母ハ鶴本が妻と志ししとく繕んで縫裁の旁に代と心母  
にさして月日と送りたり家に鶴本醫師と移移く其出  
而正一貞室と撰とてふまは瘡治かして手廣く

醫と求るといふものづらう 兵庫が事毒服せんると慶て  
志づらに財致ん念せらる故腰骨自若として疼ざり  
たれば兵庫ひそりに鶴本子對して父報業の死は處  
世身もかくのぶとく不仁の人とあり俱子天と戴うさか  
の仇目ありわらうとくおるの叶うばあまらう仇人のとめ  
に世身も名具とある天令神命に放きしるふを明を  
てこれ子よつて六角氏の春山の恩と名ひ今又美忠の  
養子保子あづりて親子久しく慈憐子生令と令した  
かくのたうとく偶然とて存命あとも神意も意だる  
らだつたよく自殺して天令と終るべしあのおの大恩  
先母二人のやうとも恩意といふと涙をがらけの



先生宿怨ありて我家の病人を救ひぬる老翁也  
てあま我任あり平齋と銘するありれとはゆき侍  
深室子入り無庫が孫ととくせんとく神其の瞳  
と宜ありゆみの英雄あり我らありて其痛と全活  
今日より七日の初とあり八日にして病加んや  
其家の社檀まじりくともや神其の巖後と始む  
親子亦信公肝膽まじりくともや神其の巖後と始む  
我子よりく鶴本をよむまじりて今宵は休息あり  
食糧とよめ又明日の初ありべんといふ子老翁  
ゆりく初中飯食あり昼夜依びだるは生辰始夜  
中膳く藤く又明朝庵後ありといふ子鶴本も其

いすも其異人ありまよとことりて自惚く  
伊沢母子竹ぞ休食せん其後ありてその伝は  
かくれとくありて六日六夜七日のまにりて老翁始  
て願く鶴本氏其職よしとかくれとく丹誠とあり  
神職中れ賢才なり伊沢氏親子の伝公精誠竹を神  
感あり人や明日の病癒く昔にゆき一且只今  
にあり女子あり自烈賢性あり星下ゆきと安ん  
あま一其女子と侍ひ来る老婦又是神使あり  
鶴本あかづくはとの子鶴本さんそくまわがり  
ゆき下敷物へ一人の老女一女子と侍ひて今宵の一  
宿成ふ其孫子ありむだくと迷れを鶴本を

菖の若る夕と自立をく見の一人の老女西顔白  
髪深室の老を紡織としてむさおある二女子との齡  
十七八歳にして紅粉をかざりて夜裳を深野ゆれども  
嬋娟なる容顔嬉々を風姿只神仙の人問ふとち  
をふに似たる鶴木をたちよつて一宿竹より容易  
ありたて竹月ありとも遠苗を子ゆりさるべしとのま  
あ女辞伏して恩と謝しこれに鶴木俤て深室まの  
に兵庫母子のりてそて大子發駭して正身は次室の息  
女操のあしむやとの子操の抱氣のおどく母を我夫  
うとやうすがらと涙ぐむる雨のおどくさうらう由友  
ふあふさうらうのひよる父母よりさうらうとく神道

智得の老女のりて隨身一日夜丹誠をけくして  
ゆく丈夫の折傷を代りんと祈誓を今朝詭難  
かく時子及びて世老女ありあひ神勅ありてはと俤ひ  
夫子對面ありしむさおあるさうらうらるる後孫のおどくあ  
むむともあしむも母をばけいあし母を母上ま老子  
見えたる津買の加護ありがく勿神をいと請りたる  
に母子悲喜交り泣く老女子のひあく思ひ謝をれ  
を微笑して點眼あり其時老翁さうらうらるるあがりて  
時節到来神冥普人子應あり能行ぞ明日とゆんやや  
服紗子包るおんぬく兵庫を伏さめ腰遣さうらる  
七八教育ありぬ一打さうらう其おんぬく二打腰下れ

我乃ある多と押おえ四五歩に及びて腰屈伸意のど  
とく七八歩後を全神一同して起居むりれどく一不  
乃煩了死不おきれを死ささり九孫して神威立勝に  
徹久病頓子疼く平生に異あるあり即之に先  
系神秘乃嚴終子よふ竹の幸りあらんと修政恭  
伏に系に母も操も感涙せよあに伏孫むよりなり詞  
お一鶴もた子積賞して神明擁護告に祥一悪疾癒た  
乃龍魁もたうらんとども老翁乃嚴終実子神明乃内  
體よと死不側の冥瑞と見るる神職の冥加はとぬしと  
涌躍して歓喜あせむ老翁曰くれどく善人集りてかく  
乃ごとく困厄の間あて伝心急ぐに何ぞ感應あきと

わん兵庫のつとぎ次官がかく馳けはりて告あしせよ又  
りて死に江死たを起りて大守れ方に毒殺の患あつたえ  
西二日と経るやもは服紗おぬり身折と振るとるは  
毒氣をくば復疑ひか一次官子あえん彼よりやうは  
かろく今今いそとありと側乃老女と傳りて檀上よとび  
登まよば忽一陣の清風起りて形消えく冥あに青白  
乃幣帛二枚を右子とて扇たたり鶴木初親子夫婦  
両とに神感乃たんとする心肝子母りて仰と見えま  
あつた鶴木漸くおほききく兵庫と促して次官がかく  
つとぐりめあ婦人の杖わらりて氣はくひぬしとつとま  
まは兵庫の全身金鉄のおとくひりたりとつとまひ子

素より其後子もせ給りけし時江丸の屋敷に依り本彈正  
が互逆増長して建武軍方も漸くと大身と相り逆謀  
まをらるるあり今日彈正が邸屋敷請待かまはる  
やて新子高殿と造立し其莊嚴珠玉とらりばめ花美  
死にくして茲後人列をかし其來駕とまら其別限に  
及びて屋敷行列綺羅と飾りて渡河ありきれば彈正  
邊に迎へまはり先立して書院子請し儀式乃ち食膳と  
嚴重にして夕刻子及びて奥殿子接しあはせ多く其義  
人と多くして青世とひく奥殿に屋敷も沈辟乃ち  
多き美人の中に淨目子と南のありく側ありくは  
戲謔乃ち酒盃と改めて名酒と献じ屋敷行の心ゆく盡

ととりのみ子致する美人のまはらむに淨腰の珊瑚  
珠を發して推け流るるに屋敷淨心にきて盃と下  
にとりまをらるる見合せのよに美人等たをむきよ  
せて淨側子よりの盃をとりて志ありく淨子よは  
そそぐ一吸喉に毎ると忽ち神腦亂ありて面上は  
張わらへしとの候そとに倒まのひりく美人等と  
わけて上の淨氣及次の外ありと噂りたれを彈正  
はまをり抱き起しまらぬ依り本監物淨連人張る  
連くありしがかくと岡よりをせはきて淨側よ  
に指針とらんくやんく怒と勵し彈正の側とを  
懸わらへし毒氣をらんかれを奥殿の才乃ち石れ入





たゞ身ありと押のまきで懐中より一つの服紗袖取たり  
知して胸より取らざるに接するに二回に  
忽屋形の面笑あり氣力平生どくりに起るる弾心と  
遠と眼を汝逆賊女系に命して我子毒酒とをむとの  
罷のぶふだうんとありに弾心平伏して己らまゝと陳え  
とすふと監物を片目くをせよりに若泥お即只一刀  
に弾心が首と折落し監物との後君成屋後してたら  
知られ八九人の力士左右と守護して玄園へ出るに弾心  
が家人其威とをききて又向ふ去る一妻子馬子系との  
を供奉列とともうへく改館ありきるえ来監物六角は友  
等と弟とくも腹とさうめ忠義の士とあつめて危急の

裏にとあへる且伊沢が次友まで持参る神人授與乃  
服紗袖と懐中し今日弾心が招待時節到来とあつり  
かけ一故主君乃危難ととくひあつり屋形子の改館お  
つゝ弾心が悪逆をよめて悟りあひ監物が忠義我感  
賞あつて其後討ちと見賊し弾心が邸ととりゆきて  
一族と残らぬ打たつと一藩逆仇まららるる老厚庵と  
礼ありあつと罪ありと許し忠義の士と一同子麿  
賞あつてつけて伊沢兵庫が忠誠神慮子叶ふと称せ  
らるる仇敵速討軍とをいふ伊子打捨べしと命たり  
に軍をい逆謀を起りて妻子逐電して来ぬ  
アツる屋形子怒りあひ弾心が逆をい其か軍を

さく免子よれりおとらぐらつても骨の如く極刑に納め  
度しとありたり不附伊沢兵庫崎にて軍を討ち某に  
命とあり不日に打ちりやだまし腹おれひらりに殺ひ  
の海り命とあるりつとま六角次第と殺して士卒百人  
づらりと引候して伊勢路の盜賊乃ち之を押寄せたり  
建初軍を江列と適ましく松坂九郎が地へ入九郎  
かまわれ若共死せり我子にほきてたえ江列の捕  
手ありともおとらふかと安居して嬉酒よあけりて  
暮し居り一日伊沢兵庫と卒と卒して門より入り  
建初軍を江列依家より卒りあつてあつて伊沢  
兵庫ありたりまゆく對面あるべしと迷われ軍を

大子悦び去庫の我の版の病ありつとるれ人数とある  
せりありくとあるりて運乃ちありと盜人某  
信りくは依家と若高友乃兵庫思ひたり某訪歡喜  
にたえはあつて入られとつと去庫まぐくとたれ  
入屋形ゆき命あり運謀とひく弾心ととて先事己子  
某子乃ち某に屋形の武運目物及運佐悉く卒夷せ  
て汝運謀乃某にたれとんと某ととて百捕りむ  
受悟せよふとあるれ下より捕手をらつくとやり巻  
たり大膽不敵乃軍をかうくとつとつと江列とつと  
やうて天下に公敵とあるとつとつと大膽の某汝もど  
とれ慈雀乃ちに合んやとつと力押取と去庫死らん

て腕とくへ一搦りたどて汝行乃識量あつて  
かのおとくれ大言とばや己が非義とくろりて大恩  
乃我父とろりり殺し又は亦乃盜賊とたのこて我  
に傷く甚う人子逆意とくろりて一處と騒ぐた天のせ  
めれまぬるざる不呂今母のひるまこと懐中より尺銘の  
鉄杖と知して軍を腰と連打する事七八枚若く呼ぶ  
腰骨多く折るごとく苦痛顛倒して死とあけて多甲の  
賊と呼ぶ子一同子等て松坂九郎横死の後の六角次官乃  
慈悲義氣に感して吾輩皆屋形の卒と知り汝が  
親をあせんよめればとてられたむらとか一ゆがま  
たふにようくろりて公服乃神子んせ足とほか

ひく六角氏へ恨をせり 奮悪多くあつりて天のせめ  
をせられたるかたを恨るくろりぬれぬ同音に呼ぶ  
もれを軍を事すとてれ急外に知く魂天外子とび啼  
泣して止まらぬ兵庫かくと笑ひ逆とけりゆ先との  
事竊する時其まが二物子れおろしや高手小  
にゆき一免人救とていひきたらり其旨とろり  
たえらに神速乃切と屋形甚感賞あつて軍を兵  
庫に送らり監物改事改はくろり六角次官侍は兵  
大地と送らり監物と捕て園内よく治りたる兵庫の  
武運あつて親をも軍を引あせそ母と共子そは  
うつくし懐と違しあつたため操と婚姻とて名天云

一冊行古本

九十五

と一國子ありりせり人さうんありりたの志をくくこた子  
勝がぶくくあまきども大さご海りく其終りといんれい言  
悪乃應報打に善くかぶく軍ちの大誅と善かりま序  
ハ天恩に浴凡善悪乃誰人々豈抑それざりんや

奇傳新話卷之二終

